

I. 調査の経過

1. 小豆島石のシンポジウム 2023 の開催

2023年2月11日、小豆島土庄町中央公民館に約150人の人々が集い、「日本遺産の島、新たな発見と保存をめざして！」をテーマに、小豆島石のシンポジウム2023が開催された。2年間の調査成果を報告する目的で、小豆島石丁場調査委員会が主催して催されたのである。シンポジウムは2日間にわたって開催された。

一日目の第1部では、これまでの調査成果が4人の調査員から報告された。

まず大嶋委員から「調査の目的と概要」と題して、島の石丁場の概要と日本遺産認定の経緯が説明された。調査は文献に記載されている加藤家の石丁場九ヵ所のうち、未特定の四ヵ所の特定を図ることを目的とし、既存石丁場の価値の再認識と新たな石丁場の発見が日本遺産を価値づけると強調した。

次いで高田委員から「デジタル技術を活用し陸海空から石丁場を調査する」のタイトルでの報告があった。従来の調査方法だけでなく、ドローンやサップを用いた新たな調査方法を紹介した。またデジタル技術を活用することで、詳細な状況が確認されることが示され、新たな調査方法のあり方の導入が提言された。

梶原調査員の「石丁場を探す！」は、小瀬原石丁場跡の新たな刻印と矢穴石が発見された経緯が報告された。これらの発見は山中への踏査の結果であり、石丁場の範囲比定には踏査の重要性を強調した。自己の調査体験から、踏査が最も確実かつ近道な調査方法であると結論づけた。

最後に報告にたった森下委員は「石丁場を守り・楽しむ」と題して、文化財を保護するには様々な施策が必要であること、調査後の文化財の保存をどのように図るかを説明された。そして島の宝物である石丁場を未来に繋ぐには、多くの島民が関わり活動を継続することが重要で、そのことが日本遺産認定継続に不可欠であると締めくくった。

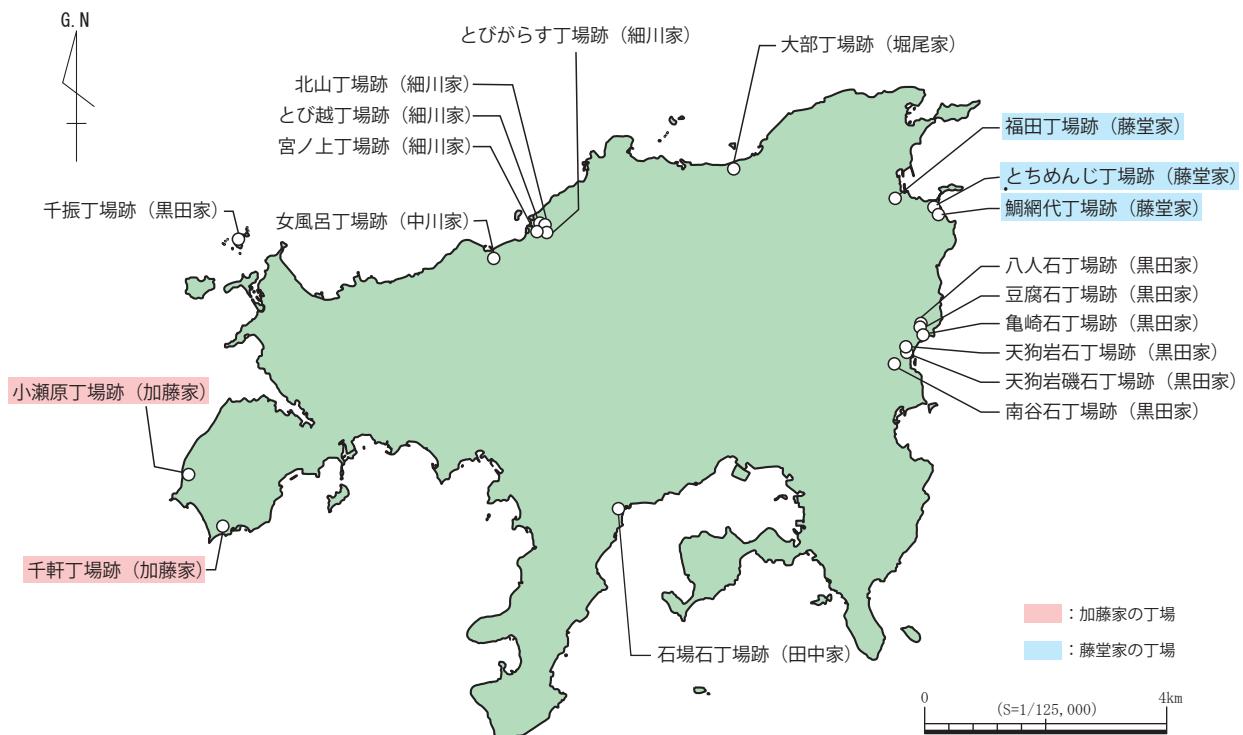
第2部のパネルディスカッションは、報告者4人がパネラーとなり、会場からの質問や意見に対して、それぞれの専門分野の意見を交えて述べた。ディスカッションのなかで、日本遺産の認定を継続させるには調査を重ねて新たな発見に至り、より豊富な材料を得て地元でのストーリーの展開が求められることが強調された。そしてそれが観光にも深く結びつくことが確



写真1 シンポジウムの様子



写真2 現地研修の状況



第1図 小豆島の大坂城石垣石丁場マップ

認された。

二日目は、現地研修として体験調査が藤堂家所持の福田石丁場で行われた。19名の島内外からの参加者が2班に分かれ、現地で調査員からの説明を受け、周囲の草木や落ち葉を除いていく。そして調査が出来やすい環境作りを行う。また、矢穴を調査する一方法として拓本採取を体験した。調査が大変な労苦だと参加者は認識したようである。これを機会に多くの人に関心を持ってもらい、島の歴史文化を伝えていって欲しい。

2. 調査の経過

第5回調査：2022年4月23日～24日 参加者23日16名、24日10名

重岩北谷筋を踏査し、矢穴石を発見した。また、福田の小島に矢穴石があるという情報を得て踏査を行い、島頂部の巨石に長さ2mにわたり掘られた矢穴を確認した。矢穴石の写真撮影、測量、サップによる海岸線調査を行った。

第6回調査：2022年9月3日～5日 参加者3日11名、4日12名、5日10名

ソナーを設置したサップおよび潜水による小瀬の磯丁場の調査を実施し、海中の矢穴石の測量等を行った。また、海岸部に石搬送用突堤(時期不明)の一部とみられる遺構を確認した。一方、小瀬および千軒集落内の墓石調査、集落内の矢穴石転用状況の悉皆調査を行った。

第7回調査：2022年11月26日～27日 参加者26日6名、27日12名

重岩北谷筋を2グループで踏査し、矢穴石を発見した。

第8回調査：2023年2月12日 参加者13名

シンポジウム現地研修（体験調査）を実施した。島内外の参加者と共同で福田の藤堂家石丁場跡の清掃を行った。

第9回調査：2023年3月21日 参加者7名

重岩北谷筋を2グループで踏査し、矢穴石を発見した。谷筋には近代・現代石丁場の遺構が見られ、一部石引道も残っている。

参加者一覧

橋詰茂・森下英治・大嶋和則・高田祐一・梶原慎司・松田朝由・上野進・小原一朗・坪佐利治・中西裕見子・大川大地・岡上峰康・川宿田光憲・川宿田好見・柴田早穂・森亜紀子・村瀬龍宇一・出口明澄・西村祐紀・谷岡花音・金丸歩美・西真人・山吹竜也・岡田茉梨愛・佐野楓夏・山崎美由紀

(橋詰)

II. 藤堂家丁場（福田地区）の調査

兵庫県姫路港への航路をもつ福田地区は小豆島北東部の要衝地である。播磨灘に東面し古来より海運条件が整った良港で、小規模ながら東西 570 m、南北 450 m の可耕地を有する平野がある。平野の北には伊豆川、南には森庄川が流れ、このうち森庄川下流東岸に南から北へ伸びる急峻な細尾根がある。空中写真でみても頂部に岩肌が見えるほど花崗岩の岩脈に覆われている。

福田地区は江戸期の大坂城築城期における藤堂家の丁場として知られ、石井家文書「小豆島高反別明細帳」には、大坂城築城から数十年が経過した明暦3年（1657）の福田の御用石場として、「西谷」「東谷」「柾面地」「鯛網代」「荒浜」の5箇所が記されている。そのうち荒浜を除く4箇所が藤堂和泉守高次の管理する丁場と記されている。なお、荒浜は播州商人（与兵衛）による管理と記されている。

過去の調査では、福田地区の南側海岸に矢穴跡を残す種石の所在が判明しており、今回の調査では、本丁場跡から北西 630 m の伊豆川沿いでも大形の石材採取痕跡があり、同時期の石丁場跡の存在が判明している。これらの石丁場跡と文献記事との照合作業が今後の調査研究課題である。

1. 小豆島町指定史跡「大坂城築城用残石」の調査

福田地区の北端付近、尾根筋西側の「森滝」と呼ばれるエリアに、矢穴跡を残す大形の石材 2 基が存在する。付近には花崗岩片が多数分布しており、一帯は小豆島町指定史跡「大坂城築城用残石」に指定されている。

石材の一つは、長辺 4.5 m、短边 1.8 m、厚さ 1.3 m の大きさで、断面は台形である。母岩から破断した割面を下にして残存し、上面は自然面に覆われる。接地する下端縁辺に

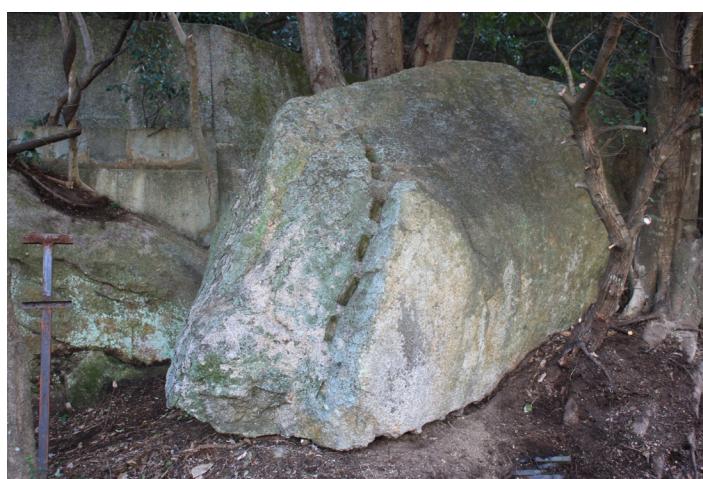


写真3 小豆島町指定史跡「大坂城築城用残石」